大泉村埋蔵文化財調査報告　第19集

山梨県北巨摩郡大泉村

史跡　谷戸城跡Ⅵ

――平成15年度　環境整備事業に伴う発掘調査概報――

2004・3
大泉村教育委員会

例　言

1　本書は平成15年度に実施された史跡谷戸城跡の環境整備事業に伴う発掘調査の概報である。
2　本調査は文化庁及び山梨県の補助金を受けて大泉村教育委員会が実施した。
3　本調査の期間は平成15年10月15日～平成16年２月27日までで、調査面積は240㎡を測る。
4　本書の編集は渡邊が行った。執筆は第１・２章を渡邊が、その他は文頭に記した。
5　発掘調査及び本書の作成に当たっては次の諸氏・諸機関のご指導、ご協力を賜った。記して謝意を表したい。
秋山　敬、出月洋文、小野正文、十菱駿武、谷口一夫、田畑貞寿、新津　健、萩原三雄、本中　眞、八巻與志夫、吉岡弘樹（五十音順、敬称略）
文化庁、山梨県教育委員会学術文化財課、山梨県埋蔵文化財センター
6　本調査の諸記録、出土品は全て大泉村歴史民俗資料館に保管してある。

目　次

第１章　平成15年度事業の概要 …… 2
第２章　本年度の調査成果 …… 7
第３章　出土炭化材の自然科学分析 ……14
第４章　地中探査レーダー調査 ……18

第１図　史跡谷戸城跡・位置図（S＝1/50,000）

第1章　平成15年度事業の概要

平成15年度は、史跡谷戸城跡保存整備事業に伴う発掘調査が6年目に当たり、5年計画で進められる整備工事の3年目となる。発掘調査は遺構の規模を把握することに主眼を置いたため、地中探査レーダー調査で遺構の存在が推定された一の郭虎口周辺、昨年度の調査で空堀を確認した北斜面に範囲を絞って調査を行った。発掘によって出土した炭化材は、科学分析により城跡の年代を特定する資料としている。整備工事は南斜面と五の郭を対象として、保護盛土・排水工を行った。

埋蔵文化財緊急発掘調査事業としては史跡範囲確認のため指定地周辺の発掘調査を実施したほか、同じ目的で城跡北東の田地を地中探査レーダーにより調査した。

普及活動として社会教育事業のなかでの歴史講座の開催、広報誌上での『甦る谷戸城跡』と題した連載を行なった。

また、新たに谷戸城のガイダンス施設建設に着手したため、これまでの記念物保存修理事業（一般整備事業）に加えて史跡等総合整備活用推進事業（特別事業）を導入することとなった。

史跡谷戸城跡調査保存整備委員会抄録

平成15年度には、史跡谷戸城跡調査保存整備委員会を2回、同専門委員会を4回開催した。

平成15年5月19日　第17回史跡谷戸城跡調査保存整備委員会

平成14年度事業の報告、15年度の発掘調査計画と整備工事計画の説明、土塁の整備方法、ガイダンス施設、見学路について検討

平成15年5月19日　平成15年度第1回専門委員会

15年度の発掘調査計画、整備工事（郭内の表土面の仕上げ）、年次整備計画の見直しについて検討、ガイダンス施設、史跡の二次指定について確認

平成15年7月14日　平成15年度第2回専門委員会

ガイダンス施設（事業費、建設スケジュール、規模、展示内容）について検討

平成15年8月26日　平成15年度第3回専門委員会

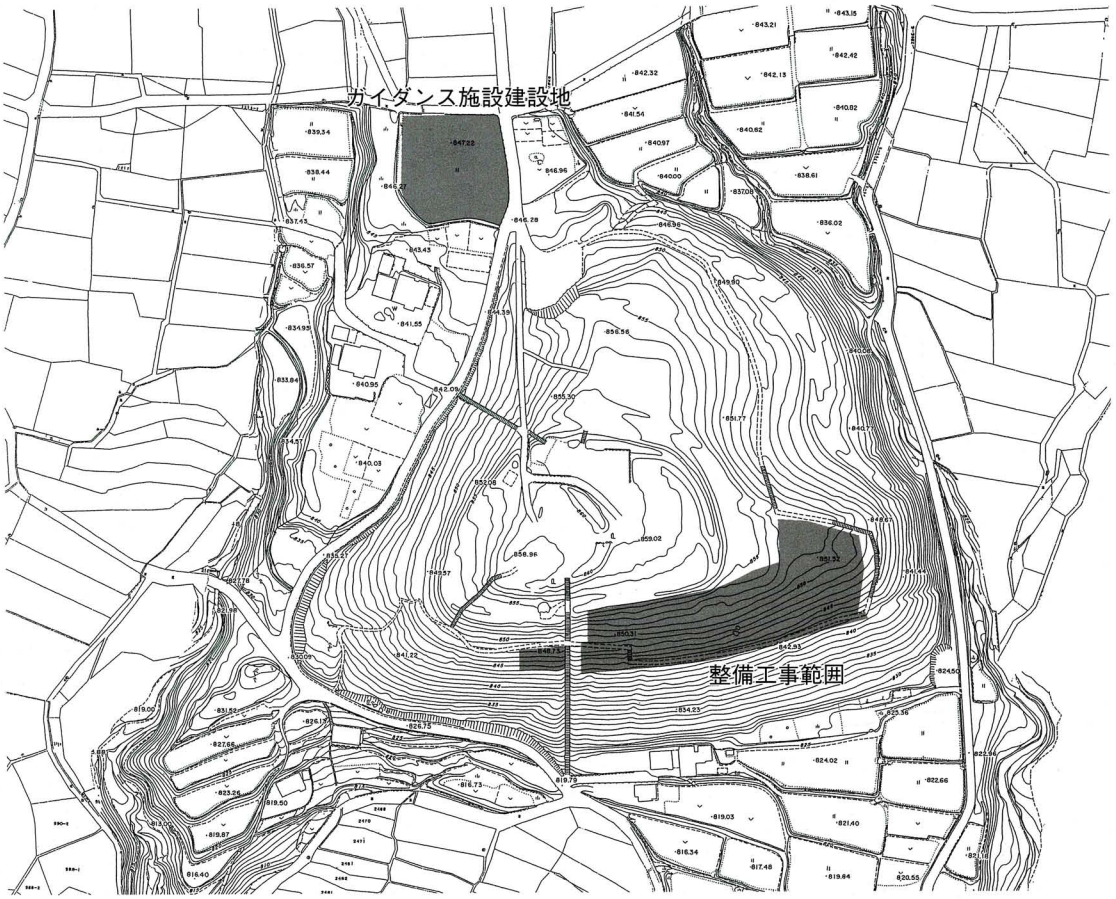
ガイダンス施設（計画変更、機能、展示内容）、整備工事（土層断面の剥ぎ取り、遺構整備）について検討

平成15年12月9日　第18回史跡谷戸城跡調査保存整備委員会

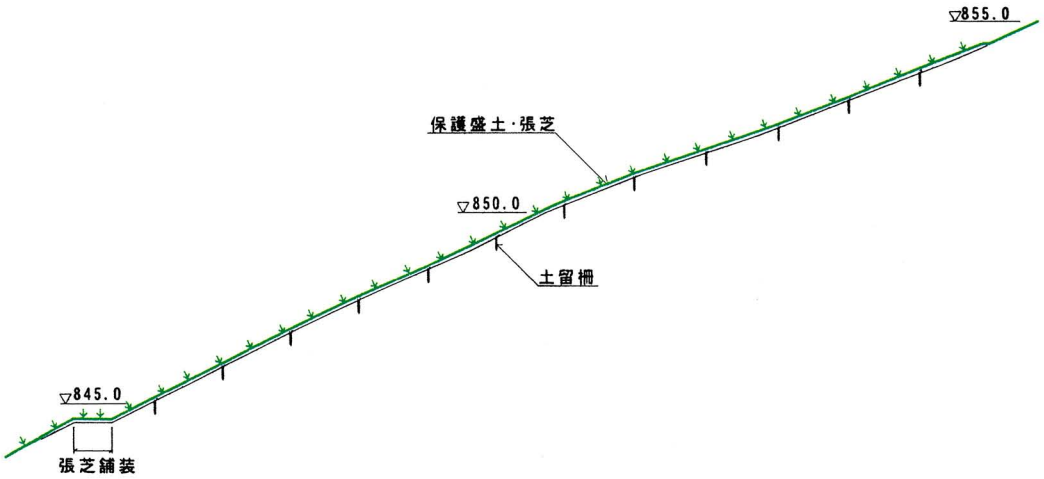
発掘調査の途中経過の報告、ガイダンス施設（施設名称、銅像、展示内容、館内の部屋の配置、収蔵庫）について検討

平成15年12月9日　平成15年度第4回専門委員会

ガイダンス施設（銅像、収蔵庫、館内の部屋の配置、展示の流れと詳細な内容）について検討



第２図　平成15年度整備工事範囲



第３図　南斜面整備工事断面模式図

平成15年度整備工事

今年度は南斜面及び五の郭を整備対象とした（第２図）。主な工事は保護盛土と排水工である。

谷戸城内の導線として、北から城に入り、西～南西斜面の帯郭を南へ進んで二の郭南側虎口から三の郭へ進入するというルートが想定できる。南斜面は虎口から入るときの正面となるほか、北側がなだらかで南側は急斜面という山の形なので、山を見たとき最も目立つのが南斜面であることから整備が必要と考えた。

盛土は工事範囲全体を対象とし、10cm の厚さで行った（第３図）。工事範囲のうち、五の郭を除いた部分

が全て斜面なので、杉板による土留め柵を設置しながら盛土した。杉板は幅９cmのものを使用し、1.5～２mの間隔で柵を設けた。雨水により柵の下から土が流失するのを防ぐため、その部分に砕石を入れている。盛土上は芝で被って仕上げとした。

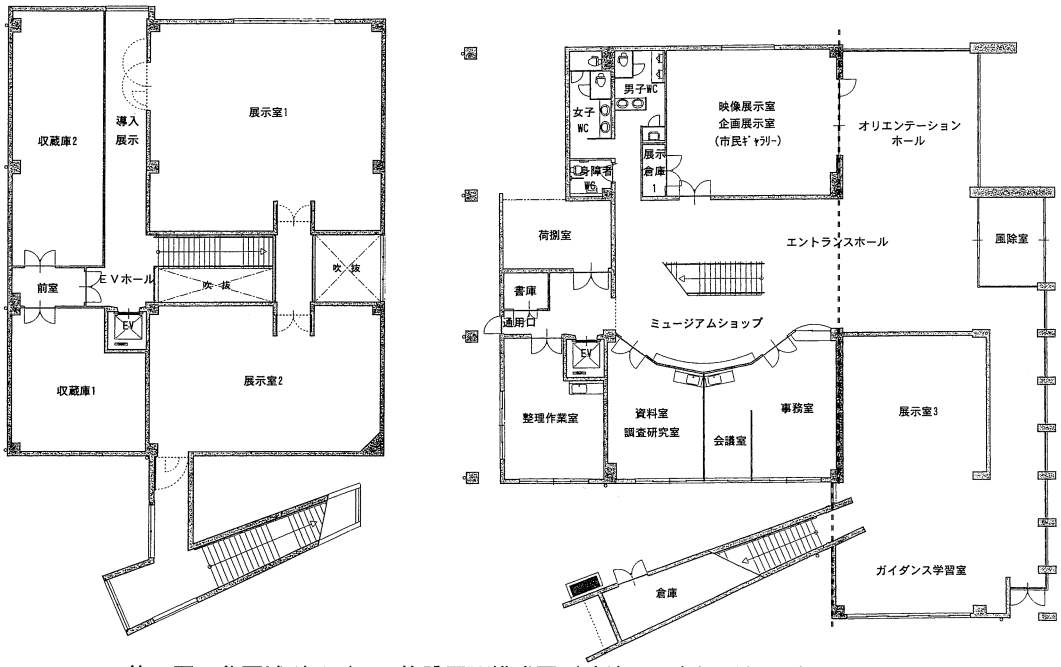
排水路は既存の遊歩道の下に設置した。遊歩道には20cmの厚さで砕石が敷かれており、この上面から30cmの深さまで掘削した。砕石を除くと10cmの深さの掘削となり、この深さでは遺構面に影響しない。

ガイダンス施設建設工事

谷戸城のガイダンス施設については、これまでもその必要性が指摘されてきたが、用地確保の問題や同じ大泉村内にある史跡金生遺跡のガイダンスを兼ねる大泉村歴史民俗資料館との整合性について整理できていない部分もあり、事業の実施は見送られてきた。しかし、平成14年になって用地の確保に目途がたったことで、ガイダンス建設を含めた特別事業の導入が検討されるようになり、14年度中に用地を確保できたことでガイダンス施設建設が現実的なものとなった。

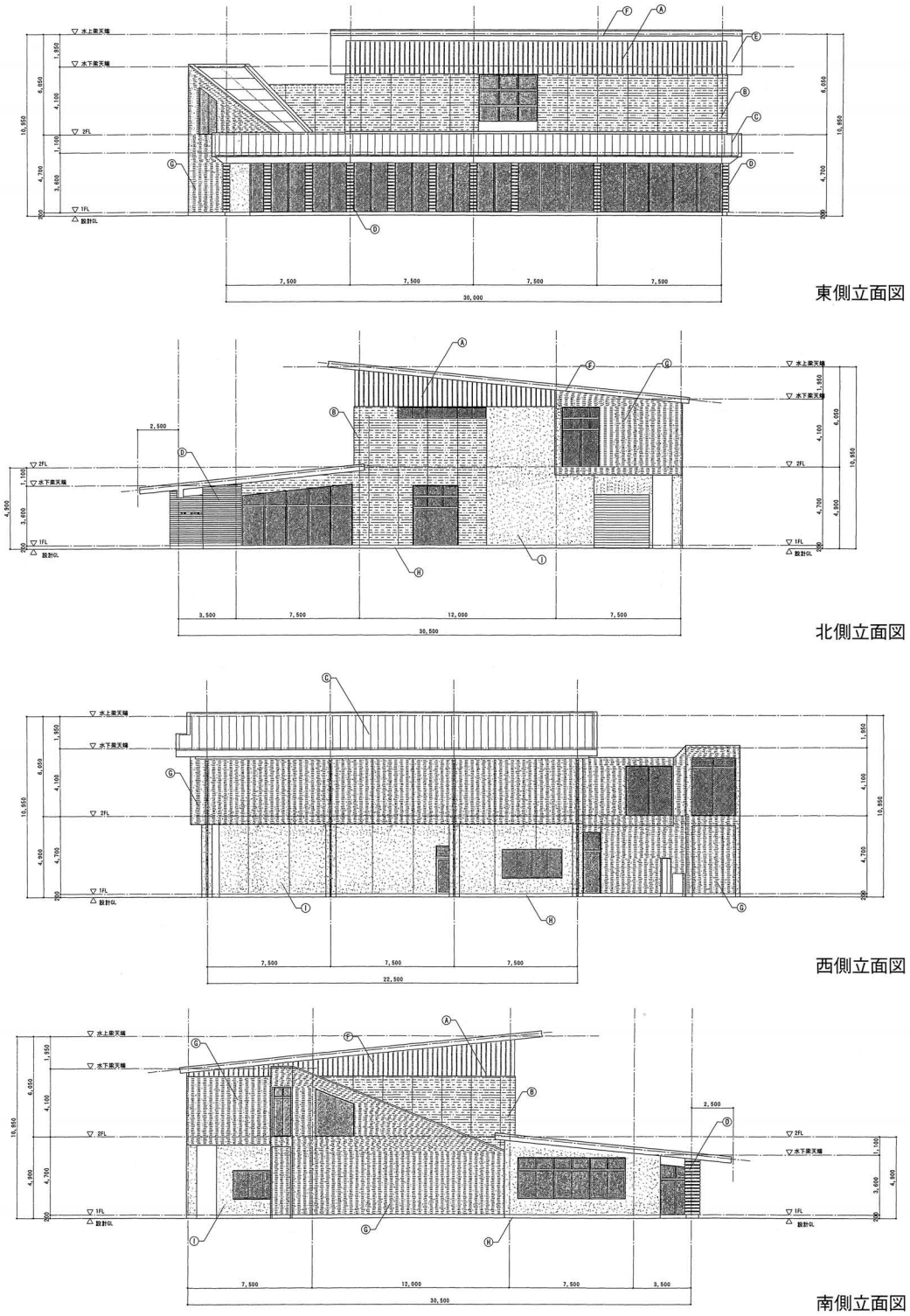
今年度に入り約400㎡のガイダンス施設の検討を始めたが、町村合併に伴って村内施設の建設計画を検討する中で、中央公民館とそれに併設する既存資料館を取り壊し、新たに市民センターを建設する計画が浮上した。これを受けて既存資料館で担っていた金生遺跡のガイダンス機能、村内埋蔵文化財の収蔵・展示、調査・研究の機能を谷戸城ガイダンス施設に合わせることとなり、２階建て、延べ床面積1,231㎡の規模に建物を拡大することとなった。文化庁との協議により、今年度だけ記念物保存修理事業（一般整備事業）のほかに史跡等総合整備活用推進事業（特別事業）を導入することが認められた。今年度の事業内容は、建築設計と建物の基礎工事までである。建物の概要は次のとおりである（第４・５図）。

構　造	鉄筋コンクリート造	延床面積	1,231㎡（１階―753.7㎡　２階―477.3㎡）
敷地面積	2,333㎡	谷戸城ガイダンス面積	307.5㎡（全体の約25%）
建築面積	882㎡	歴史資料館面積	923.5㎡（全体の約75%）



第４図　谷戸城ガイダンス施設平面模式図（破線より右側が谷戸城ガイダンス）

展示内容は大泉村内に所在する史跡金生遺跡と史跡谷戸城跡のガイダンス展示に特化することとした。3つの展示室は、史跡金生遺跡のガイダンスを主とした縄文時代、谷戸城成立前史と位置づけた平安時代、史跡谷戸城跡を中心とした甲斐源氏勃興期から中世、という構成である。これらの展示を括る大きなテーマを「八ケ岳南麓の風土と歴史」としている。そのため、館全体の導入部分であるエントランスホール・オリエンテーションホールでは地域の風土として八ケ岳南麓の自然環境にもふれることとした。



第5図　谷戸城ガイダンス施設立面図

ガイダンス施設に関する史跡谷戸城跡調査保存整備委員会抄録

12年5月9日　12年度第1回専門委員会

ガイダンス施設の必要性について指摘される。

12年11月14日　12年度第3回専門委員会

既存の資料館の展示に谷戸城ガイダンスの機能も含めればよい、との意見も出される。

14年6月21日　第16回整備委員会

既存の資料館の展示に谷戸城ガイダンスの機能をふくめてはどうか、との意見が出されたが、スペースを割けないため無理と回答。現時点では、用地取得を目指していると説明。

14年11月19日　14年度第2回専門委員会

事業が遅れ気味であることから、事業計画の立て直しを指摘される。新計画にはガイダンス施設建設を視野に入れた特別事業の導入を含めることとした。

平成15年3月に用地を取得。

平成15年5月19日　第18回整備委員会

ガイダンス施設建設を15年度に用地取得、16年度に設計、17～18年度で建築というスケジュールを提示し、了承された。

平成15年7月14日　15年度第2回専門委員会

ガイダンス施設の面積は約400㎡であると伝える。

平成15年8月

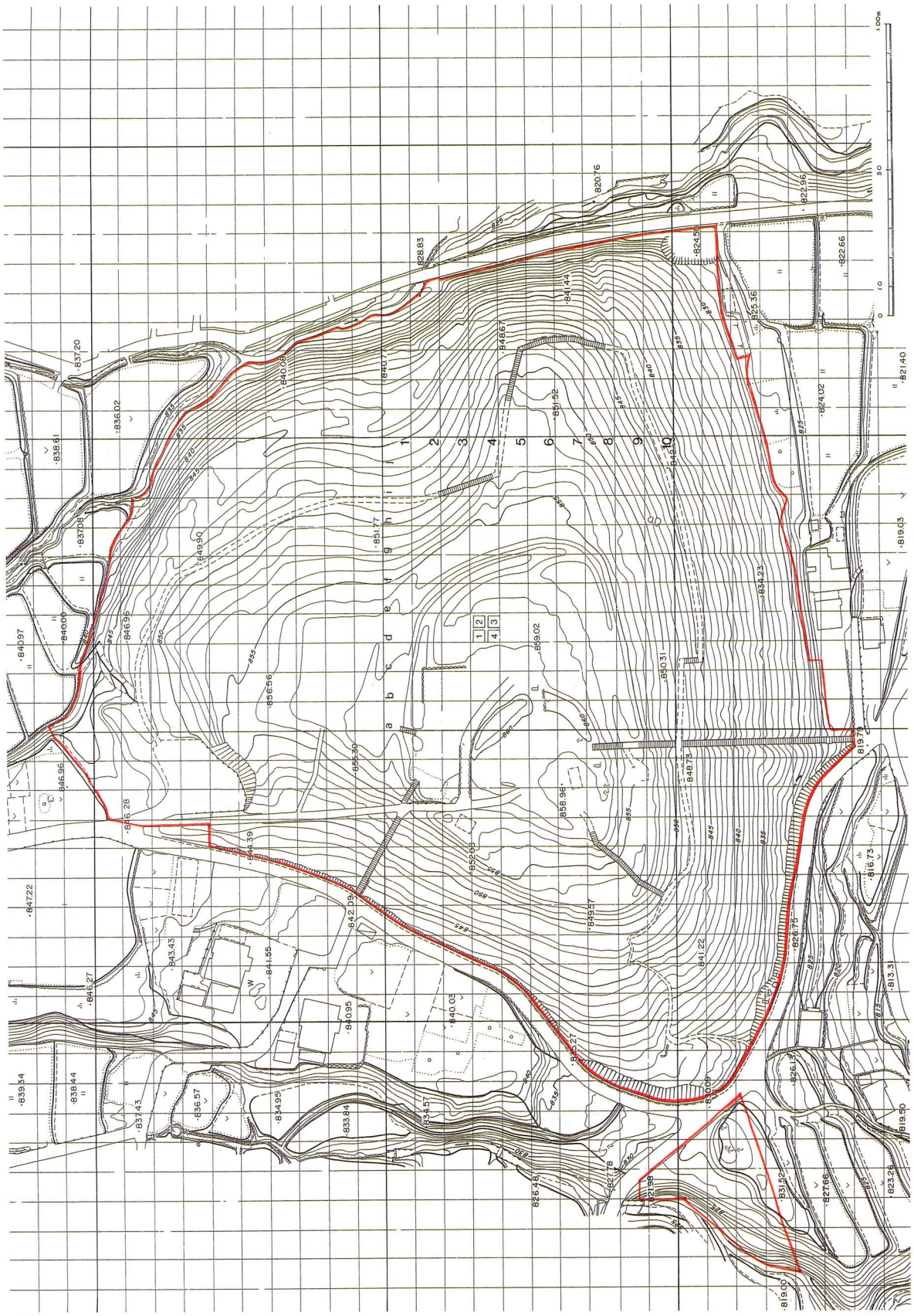
現資料館と中央公民館の敷地に大泉総合支所を建設するという村の方針転換により、谷戸城ガイダンス施設と現資料館の機能を併せた施設を建設することとなった。平成16年5月までに建物を完成させる、という計画となった。

平成15年11月19日　文化庁との協議

作業工程として16年10月までに建築を終了し、内装・展示工事を18年3月までとするように指導を受ける。

平成15年12月9日　第18回整備委員会及び15年度第4回専門委員会

各展示室のテーマについて、展示室1では金生遺跡、展示室2では平安時代の八ヶ岳南麓の開発と牧、展示室3で谷戸城とすることが決まった。



第６図　史跡谷戸城跡調査グリッド配置図（Ｓ＝1/2,000）

第2章　本年度の調査成果

本年度は城の北斜面、一の郭外側、二の郭と三の郭の境界を調査対象とし、合計19のトレンチを設定した。調査方法はこれまでと同じく４×４ｍのトレンチを基本とし、想定される遺構の形状・範囲を確認することに重点を置いた。

北斜面（第７図）

北斜面は四の郭から北に続く斜面で、城として使われていた当時の通路をほぼ踏襲していると推測される道が２本存在する。１つは四の郭を取り巻くように整備された遊歩道、もう１つは谷戸城の北に隣接する田地へ入るための「馬入れ」道である。昨年度の調査で、遊歩道下に東斜面へ続く空堀があり、その外側には土塁のあったことが判明した。今年度は、遊歩道下の空堀がどこまで続くのかを確認するための調査である。

第７図　北斜面調査区全体図（Ｓ＝1/500）

東斜面へ続く空堀（写真１・２）

遊歩道上に３つのトレンチを配置して調査を行った結果、昨年度報告した溝状遺構がこの空堀の始点となることが確認された。

昨年度に溝状遺構と空堀を発見した時、その間は約35ｍ離れていた。この35ｍの間に空堀は西から東へ除々に深くなって東斜面に続いていく。東斜面を北から南へ進んだ空堀は、その途中で東に折れて山の斜面を分断する竪堀となって終わっている。

この空堀は、北東～東斜面と城内を分離する役割があったと考えられるが、スロープとなるように掘られていることは通路の機能も重視されていたことになる。しかし、この通路をたどると山を下りてしまう。東側の傾斜をみると下ることはできても、登ることは困難に思える。地中探査レーダーの調査結果からは、谷

戸城の築かれている城山の外側を北から東に囲む空堀の存在が推測されている。これが事実であれば山を下った先も城内であり、何らかの施設があった可能性がある。谷戸城周辺遺跡の調査と合わせて、継続して考えていきたい。

写真１　空堀断面（ｅ－３－１）

写真２　空堀調査状況（ｄ－２－４　東から）

北の城外へ続く空堀（写真３・４）

前述の馬入れ道は、北に若干開いた土塁に沿うようにあり、谷のような地形からは埋まりきらない空堀の跡と考えられる。調査地点は駐車場から遊歩道に入る部分にあたる。上幅500cm 以上、底幅30cm、現地表面から底部までは200cm 以上の深さがあり、壁面の勾配は約45°を測る薬研堀である。当初は東斜面に続く空堀と同一のものと考えたが、方向が馬入れ道に向いていること、溝状遺構が空堀の始点となることが判明したことから、北の城外に続く空堀と判断した。

調査地点から北東側15ｍほどの間は空堀の痕跡が消えて平坦であるが、確認された空堀の底部は北東が深くなっているので、途中で上がることなくそのまま城外へ延びていると推測される。また、以前の地中探査レーダー調査で駐車場（調査地点の西側）の下を東西に空堀が掘られていることが指摘されており、これに繋がるものと考えられる。

写真３　城外へ延びる空堀の痕跡

写真４　空堀調査状況（ｊ－２－３　東から）

一の郭虎口周辺（第８図・写真５）

昨年度の地中探査レーダー調査で虎口を取り巻く空堀の存在が指摘された箇所である（第４章参照）。平成９年度の試掘調査では、土塁下に延びる空堀を確認している。現状は平坦で、空堀の痕跡はみられない。

空堀Ａ（写真６～８）

一の郭土塁に沿うように掘られた空堀で、幅約250cm、現地表面からの深さ約150cm、壁面の勾配35°の比較的緩やかな空堀である。この調査地点の南北でも確認され、これらと繋がると考えられる。北側では土塁から離れていくようであり、南では土塁下に入っていくようである。地中探査レーダーの報告にあるような空堀の切れる部分は見つからず、虎口をふさぐように空堀が掘られている点からは、土塁築造以前に掘られた空堀であると考えられる。

写真５　一の郭虎口周辺現況（北東から）

写真６　虎口前面調査状況（ｂ－５－３　北から）

写真７　空堀Ａ断面（ｂ－５－３）

写真８　一の郭北側での空堀Ａ検出状況（ｊ－３－１　東から）

空堀Ｂ（写真６）

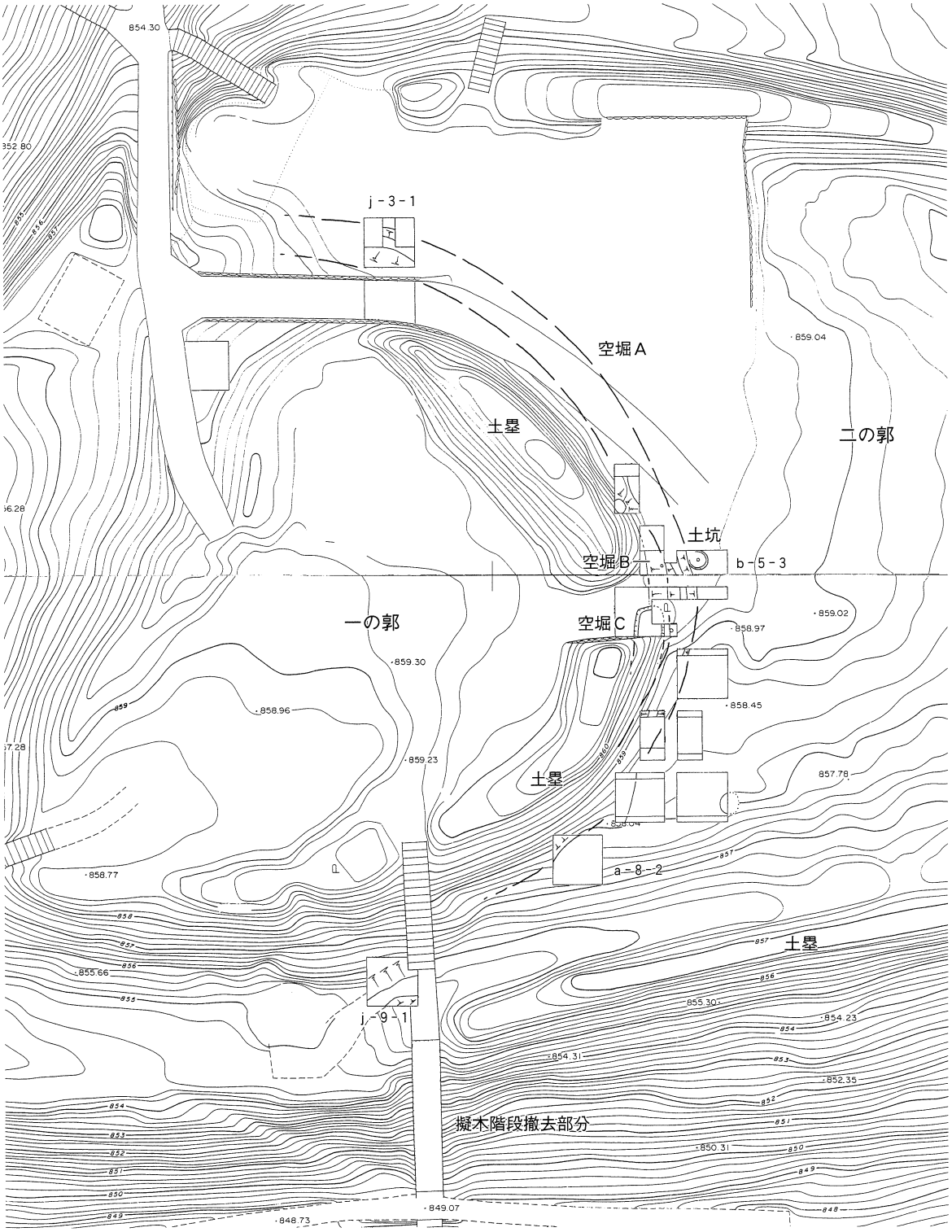
空堀Ｂは浅く幅の広い堀状の遺構で、空堀Ａと重複する。重複する部分の土層断面を観察すると、空堀Ｂの底面にあたる高さの層は硬化しており、空堀Ａの底面はその下にあることから、空堀Ａのほうが古いと考えられる。この遺構は西側（一の郭土塁側）が掘り込まれているのを確認できるのに対し、東側の立ち上がりははっきりしない。対称形ではなく、片薬研のような形の掘り込みは帯郭で確認されている。帯郭では外縁の土塁で掘り込みが区画されているが、この地点では区画する施設はみられない。一の郭虎口に付属する段状の造成であるとも考えられる。

後世、この遺構の上面には土が盛られている。平成10年度に初めて二の郭を調査したとき、このような層が調査区のほぼ全面を覆っていた。その時は現代の撹乱と報告したが、一の郭虎口から二の郭へ傾斜している箇所を覆って平らにしているのをみると整地層と考えることもできる。空堀Ａ・Ｂともに自然に埋まってから盛られた層なので、直接縄張りを変えるようなものではないにしても、最終段階でかなり大きな改修を受けている可能性がある。

空堀Ｃ（写真９・10）

平成９年度の試掘調査で発見された、土塁の下に重なる掘り込みである。上幅240㎝、底幅210㎝、地表面からの深さ130㎝を測り、虎口へ230㎝飛び出した格好となっている。便宜的に空堀としているが、垂直に近い傾斜で掘り込まれた空堀は、これまで城内で確認したとはない。

土層断面を観察すると、はじめに西側（一の郭側）から埋まっていくが、流れ込んだ土が底部全面を覆う



第８図　一の郭虎口周辺他調査区全体図（Ｓ＝1/500）

前に人為的にローム土で埋め戻されている。この埋土は地表面から60cmの深さでほぼ平らとなっており、整地が目的であったと考えられる。その後、また西側から少量の土の流れ込みがあった後、その上から土を被せるように埋土が行われている。この遺構には西側から土が流れ込んでいるが、東側から流れ込む土はない。流れ込んでいる土は上層も下層もローム土の後に黒色土の順で、その上に埋土を行う点でも共通している。ただ、上層の埋土は黒色土の傾斜に合わせているようで、埋土の上面は平坦になっていない。

このような特徴からは、西側に土による高い構造物があったことが推測され、周囲の状況からも土塁であったと考えられる。ある時期、一の郭の土塁が空堀Cの上を覆っていたが、改修により土塁を削平して虎口を広げたということになる。また、空堀Cは空堀Aが埋まってから掘られ、すぐに埋め戻された（下層の埋土）という状況も観察された。しかし、掘ってすぐに埋め戻した理由については不明である。

写真９　空堀Ｃ（ｂ－６－１　東から）

写真10　空堀Ｃ断面

土坑（写真11）

空堀Ａのすぐ東側で発見された。直径約150cmの円形の土坑で、確認面からの深さは30cmを測る。中央には直径25cm、土坑底面からの深さ10cmのピットも確認された。空堀Ａを挟んだ反対側にも同じ規模のピットがあり注目される。土坑からは内耳土器の破片と半分に割れた石臼の上臼が出土した。

おにぎり状炭化物（写真12）

ａ－８－２で出土した。表面を観察すると、米のような粒が沢山集まった塊に見える。昔ここで遊んだ人の多くに、一の郭内の土塁裾で焼米を拾った経験があり、それに関連する遺物として注目される。

写真11　土坑（ｂ－５－３　東から）

写真12　おにぎり状炭化物出土状況（ａ－８－２）

二の郭南側虎口（第８図、写真13・14）

平成13年度に続く調査である。この時の調査では石列の発見と空堀が浅くなる点から、二の郭南の喰い違い虎口であると想定した。しかし、コンクリート舗装の園路によって調査できない部分があったため、今回はその部分にしぼって調査を行った。

その結果、空堀が虎口から西側（三の郭側）にスロープのように低くなっている状況を確認した。東側の最も浅いところから西へ340cm の間に50cm 低くなっており、空堀が北へ曲がる地点までそのまま低くなりながら進んでいると現況の地形の観察から推測される。

写真13　調査状況（ｊ－９－１　西から）

写真14　トレンチ南壁断面

南斜面（第８図、写真15・16）

今年度の整備工事で南斜面の擬木階段を撤去したので、その下部の調査を行った。撤去した階段は、前述の二の郭南側虎口にまっすぐ登るもので、この下には虎口に至る道や施設が残っている可能性があると考え調査を行った。しかし、それらに関する遺構は確認されず、聞き取り調査では一の郭にあった八幡神社への参道として階段設置前から使われていた道である、とのことであった。

写真15　南斜面擬木階段撤去後（南から）

写真16　調査状況（南から）

出土遺物

一の郭・二の郭の範囲内なので、いずれの調査トレンチからも中世の遺物が出土した。内容としては内耳土器、かわらけが主で、その他に素焼きの甕のような破片、香炉、石臼上臼、茶臼下臼等の破片、開元通寶、祥符元寶等の古銭が出土している。

第3章　出土炭化材の自然科学分析

「谷戸城跡採取試料自然科学分析報告」(抜粋)

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

谷戸城跡は、山梨県北巨摩郡大泉村に所在し、八ヶ岳南麓の火山性の独立丘に立地している。本城跡は、甲斐源氏の祖である逸見黒源太清光の居城とされているが、このことを確実に伝える記録はこれまで確認されていない。

当社では、谷戸城跡から出土した炭化材を中心に放射性炭素年代測定や樹種同定を継続的に実施し、年代観や植物利用に関する資料を作成している。その結果、旧石器時代～近世までの年代値が得られるとともに、特に谷戸城跡が存続したとされる平安時代末期～戦国時代に集中する傾向を認めている。一方、樹種同定では、針葉樹3種類、広葉樹14種類が確認されている。

本報告では、今回の発掘調査で検出された遺構や堆積物中から出土した炭化材を対象に、年代観および植物利用に関する検証や、これまでの分析成果と比較・検討するため、放射性炭素年代測定と樹種同定を実施する。

1. 試料

試料は、谷戸城跡内で確認された遺構や堆積物中から採取した炭化材10点（試料番号1・3～10・12）である。これら試料のうち、炭化材9点（試料番号1・3・5～10・12）を対象に放射性炭素年代測定を実施する。また、樹種同定は放射性炭素年代測定用試料と同一のものを対象としているため、試料が微量で分割不可能な試料が4点（試料3・5・9・12）あった。そのため、これらを除く6点（試料1・4・6～8・10）の炭化材を対象とする。試料の詳細は、結果とともに第1表に示す。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定は、株式会社加速器分析研究所の協力を得ている。なお、放射性炭素の半減期としてLibbyの半減期5,570年を使用している。δ13Cの値は、加速器を用いて試料炭素の13C濃度（13C／12C）を測定し、標準試料ＰＤＢ（白亜紀のベレムナイト類の化石）の測定値を基準として、それからのずれを計算し、千分偏差（‰；パーミル）で表したものである。今回の試料の補正年代は、この値に基づいて補正をした年代である。

(2) 樹種同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定結果を第1表に示す。測定年代値（補正年代値）は、170～5810ＢＰの値が得られた。これら年代値は、170～250ＢＰ（試料番号3・5）、530～670ＢＰ（試料番号7・8・10）、3510～3740ＢＰ

第１表　放射性炭素年代測定および樹種同定結果

試料番号	採取地点			樹種同定結果	測定年代ＢＰ	補正年代ＢＰ	西暦
	地点	グリッド	採取位置詳細				
1	帯郭	f - 2 - 3	黒色土下の灰褐色土中	クリ	5910±40BP	5810±40BP	－
3	帯郭	g - 4 - 2	南壁16層２	-	290±30BP	170±40BP	1780±40
4	帯郭	g - 4 - 2	南壁16層３	カラマツまたはトウヒ属	－	－	－
5	帯郭	g - 4 - 2	南壁５層	-	420±30BP	250±30BP	1700±30
6	帯郭	g - 4 - 1	南壁９層	クリ	4990±40BP	5040±40BP	－
7	帯郭	h - 4 - 4	南東隅土坑	マツ属複維管束亜属	530±30BP	530±40BP	1420±40
8	帯郭	g - 4 - 3	土坑状遺構内	ヒノキ科	490±30BP	550±30BP	1400±30
9	西～南西斜面	c - 5 - 4	西斜面33層	-	3610±40BP	3510±40BP	－
10	西～南西斜面	c - 7 - 4	南西斜面９層	マツ属複維管束亜属	640±30BP	670±40BP	1280±40
12	北斜面	e - 2 - 4	土塁部分10層	-	3790±30BP	3740±40BP	－

１）ＢＰ年代は、1950年を基点として何年前であるかを示す

（試料番号９・12）、5040～5810ＢＰ（試料番号１・６）に大別できる。

(2)　樹種同定

樹種同定結果を第１表に示す。炭化材の樹種は、針葉樹３種類（カラマツまたはトウヒ属・マツ属複維管束亜属・ヒノキ科）と広葉樹１種類（クリ）に同定された。

4. 考察

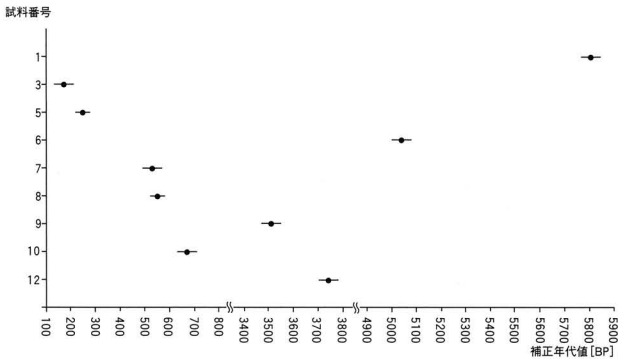
(1)　年代について

谷戸城跡から確認された遺構（土坑・土塁）や堆積物中から出土した炭化物の年代測定値（補正年代値）は170ＢＰ～5810ＢＰであった。各試料の年代測定値を第９図に示す。これまでに実施した炭化材の放射性炭素年代測定では、ＭＯＤＥＲＮ～約35000ＢＰまでの年代値が得られており、特に500ＢＰ～700ＢＰ頃に年代値が集中し、縄文時代・中世・近世に年代値がまとまる傾向も確認されている。今回の分析結果でも、500～700ＢＰに相当する試料が３点（試料番号７・８・10）あり、試料番号３・５は近世～近代、試料番号１・６・９・12は縄文時代に相当する年代が得られている。したがって、今回の分析結果は、これまでの分析結果の傾向と一致する。

(2)　植物利用について

谷戸城跡から出土した炭化材は、針葉樹３種類（カラマツまたはトウヒ属、マツ属維管束亜属、ヒノキ科）、広葉樹１種類（クリ）が認められた（第２表）。

縄文時代の年代値が得られた試料１・６のクリは、強度や耐朽性に優れた材質を有している種類である。ただし、これらの炭化材は、堆積土中から出土したものが多く、遺構からの出土例は１号集石の石の下から得られた炭化材のみである。これまでの分析例においても、縄文時代の年代値が得られた試料にはクリが目立つ。したがって、現段階では、これらがどのように堆積物中に取り込まれたか要因は不明であるが、当時、周辺に見られたクリを比較的多く利用した痕跡を示している可能性がある。なお、当該



第９図　年代測定結果の比較（バーは誤差範囲を示す）

期におけるクリの利用については、千野（1993）らの分析等でクリ材の利用が多いことが指摘されており、山梨県内では上北田遺跡等で縄文時代のクリ材の確認例（パリノ・サーヴェイ株式会社，1993）などがある。当城跡における結果は、これらともよく整合する。

第２表　時期別種類構成

	クリ	カラマツまたはトウヒ属	マツ属複維管束亜属	ヒノキ科	未同定	合計
B.C3860～1560	2				2	4
1280			1			1
1400～1420			1	1		2
1700～1780					2	2
年代不明		1				1
合　計	2	1	2	1	4	10

一方、ヒノキ科は全体的に木理が直通で加工が容易であり、耐水性・防虫性に優れた有用材である。また、マツ属複維管束亜属も松脂を多く含むために耐水性があり、土木材などに適材とされる種類である。これらの種類に同定された試料番号７・８・10は、いずれも中世以降の年代値を示している。これまでの分析結果を見ても、ヒノキ科やマツ属複維管束亜属に同定された炭化材は、中世以降の年代値を示している。これらは、堆積物中や土坑・土塁などから出土しているが、取り込まれた要因は不明である。ただし、土坑等から出土した炭化材については、燃料材の可能性がある。また、これら樹種が有する材質を考慮すると、構築材や土木材等に用いられたものが炭化し残存した可能性がある。

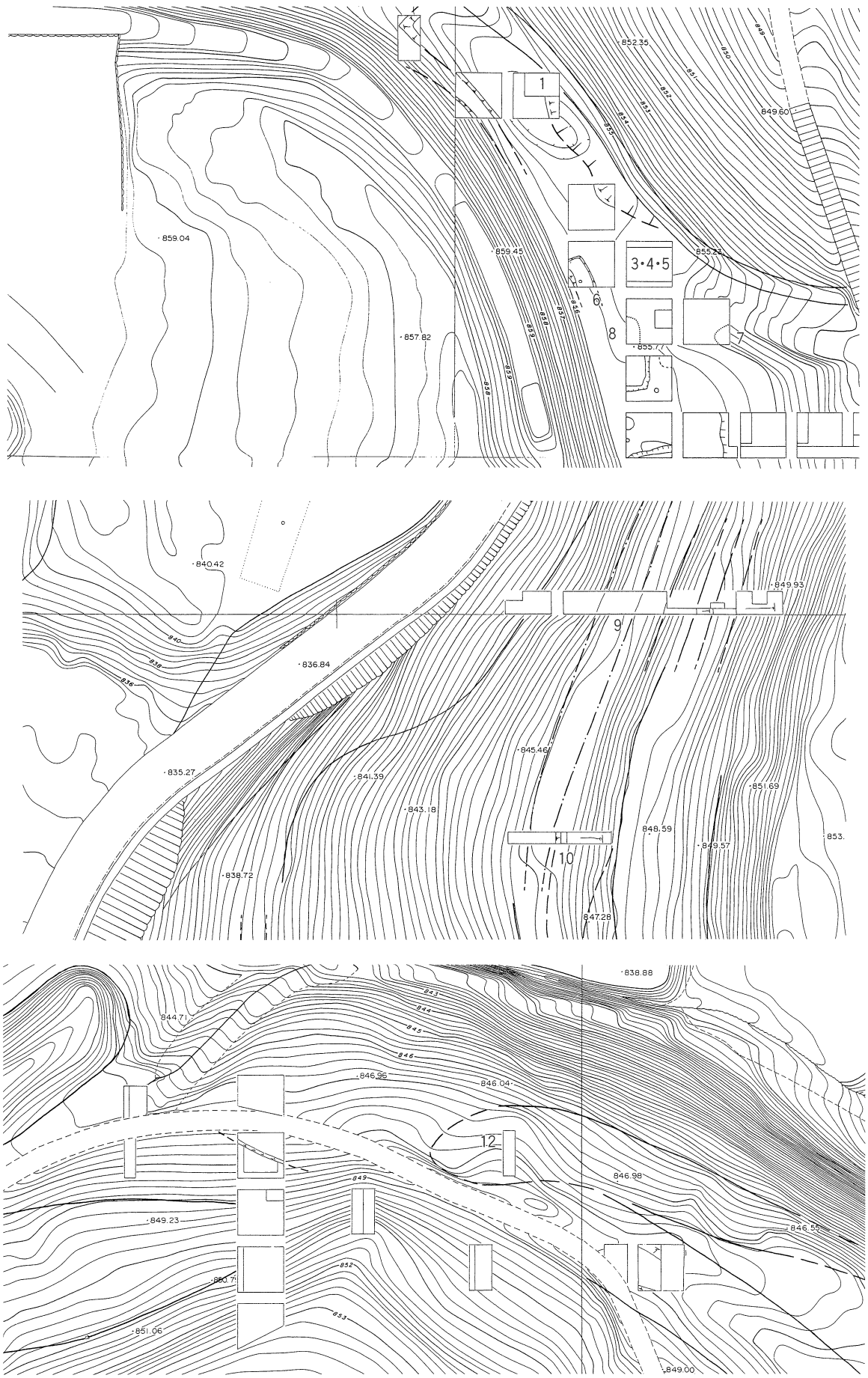
引用文献

千野裕道（1983）縄文時代のクリと集落周辺植生　ー南関東地方を中心にー．東京都埋蔵文化財センター研究論集，Ⅱ，p.25-42.

キーリC.T.・武藤康弘（1982）縄文時代の年代．加藤晋平・小林達雄・藤本　強編「縄文文化の研究　1　縄文人とその環境」，p.246-275，雄山閣.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993）上北田遺跡から出土した炭化材および炭化種子の同定．「山梨県　北巨摩郡白州町　上北田遺跡　県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」，p.1-5，白州　町教育委員会・峡北土地改良事務所.

Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, G., vanderPlincht, J. andSpurk, M. (1998) INTCAL98radiocarbonage calibration, 24,000-0 calBP. Radiocarbon, 40, p. 1041-1083.



第10図　平成14年度調査炭化材採取地点（上―帯部、中―西～南西斜面、下―北斜面、図中の番号は試料番号に対応）

第4章　地中探査レーダー調査

「平成14年度　谷戸城周辺遺跡地中探査レーダー調査委託報告」(抜粋)

テラ・インフォメーション・エンジニアリング

平成15年3月19・20日にかけて実施された、地中探査レーダーによる谷戸城及びその周辺の調査報告である。城内一の郭と谷戸城東側の田地を対象とした。

1. 一の郭調査結果

一の郭虎口において堀データが収集された(第11図上)。ここは平成9年度の試掘で土塁の下方へ傾斜する地盤が確認されていて、その状況を把握するために調査したものである。堀は虎口を取り巻くように外側に円周状にあり、データは薬研堀状の埋没形態を示している。有機性土質が整合しており、比較的自然形態で埋没した可能性が高い。一の郭土塁との関係から、土塁ができる以前までは堀としての景観を保ったまま長い時間を経過したものとみられる。土塁そのものは構造が簡単で、この城の最後の段階のものと考察されるので、土塁築造時点でこの堀は現表土の下に埋没したものとみられる。

・1が今回調査の主目的となった堀の状況である。この堀が南側土塁下に存在しているのは一部だけの可能性がある。
　北側で堀が上がっており、形からは虎口としての堀ともみられる。
・2の堀が外側の区画を形成していたとみられる。
・3については不確定要素がある。

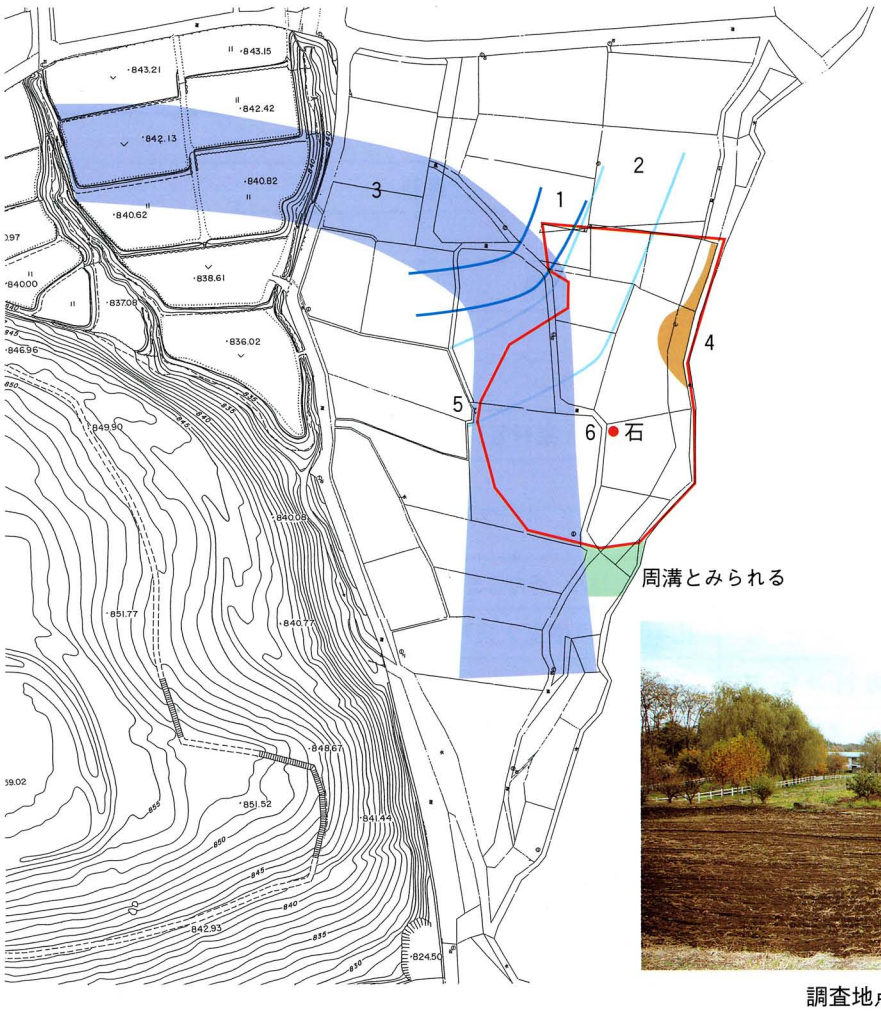
2. 谷戸城周辺調査結果

今回の調査区では特異な構造性地盤のデータが求められた。この他に目立つデータはないので、この報告を主に行う。

第11図下は土層の変化を積層的に表現し、溝などを加えたものである。土層の形からこれを前方後円墳(赤い線で示した範囲)とした場合、以下のような考察となる。

・1の溝は比較的古い。古墳が存在することがわかっていて曲がった可能性もある。
・2の溝については存在がやや不確定である。
・3の溝については地籍や下流部のデータからも存在の確度は高い。この堀は古墳の存在を無視して掘られている。
　この堀の開削段階では古墳の存在は忘れられていた可能性もある。時代は比較的新しいと考えられる。
　(13年度の調査報告で、谷戸城の北側を区画する東西方向の空堀に繋がるものと推測されているデータと同じもの)
・4に示す部分(茶色で示す範囲)では、土層は深い表現が調査地内部に食い込んでいる。前方後円墳と考察、推測した部分である。
・5の地点では地籍が複雑な形態を示している。周溝や堀が複雑に接触した場所と考察される。
・6では空洞状や何らかの塊の反射がみられる(赤い丸の部分)。地上部にも巨石が現れていて興味が持たれる。赤い線は古墳の全体範囲を模索したものである。現地籍線がこのような状況を残していることは、土層状況からも求められる。

(　)内は編集者が加えた



調査地点（北から）

第11図　遺構推定復元図（上――の郭、下―谷戸城北東部分）

調査組織

調査主体　大泉村教育委員会

調査機関　大泉村教育委員会

事務局　教育長　浅川修次
課　長　新藤　恵

調査担当者　教育係長　伊藤公明
主　事　渡邊泰彦

発掘作業員　浅川達子・浅川久代・浅川日出子・浅川房子・浅川満江・津布久功二・遠山陽一
藤原祖乃子・藤森里美・細田絹代・三井はな江

整理作業員　浅川満江・細田絹代

報告書抄録

書名	史跡谷戸城跡	
副題	平成15年度　環境整備事業に伴う発掘調査概報	
巻次	Ⅵ	
シリーズ・番号	大泉村埋蔵文化財調査報告　第19集	
編著者名	渡邊泰彦・伊藤公明	
編集・発行機関	大泉村教育委員会	
連絡先	〒409－1502　山梨県北巨摩郡大泉村谷戸3025　TEL0551－38－3115	
印刷所	ほおずき書籍株式会社	
発行日	平成16年３月31日	
史跡谷戸城跡（しせきやとじょうあと）	ふりがな	やまなしけん　きたこまぐん　おおいずみむら　やと　あざじょうやま
	遺跡所在地	山梨県北巨摩郡大泉村谷戸字城山
	市町村コード	19406
	地形図	１：50,000　八ケ岳・韮崎
	位置及び標高	北緯35°51′15″　東経138°23′20″　頂上862m
	主な時代	縄文時代・中世
	主な遺構	土塁・空堀
	主な遺物	かわらけ・古銭・縄文土器・石器・黒曜石
	特殊遺構・遺物	
	調査期間	2003年10月15日～2004年２月27日

史跡　谷戸城跡Ⅵ

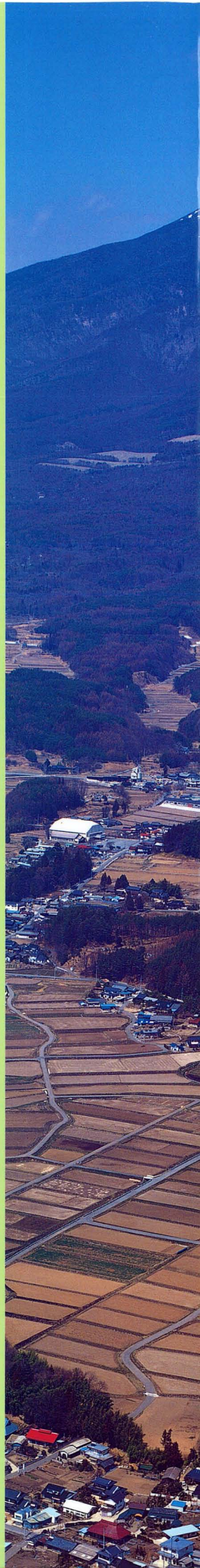
平成16年３月31日　発行

発　行　大泉村教育委員会

〒409-1502　山梨県北巨摩郡大泉村谷戸3025

TEL（0551）38-3115

印　刷　ほおずき書籍株式会社

〒381-0012　長野県長野市柳原2133-5

TEL（026）244-0235